

キロロリゾート開発の始動と2年目の課題

武田 泉*

1. はじめに

1992年の北海道地理学会巡検は後志管内を中心に実施されたが、筆者は主として赤井川村のキロロリゾート開発の案内を担当した。本稿は巡検資料を加筆修正の上、2年目を迎えたキロロリゾートの動向と地元の姿を紹介する。

2. キロロリゾート開発の特色

国有林（ヒューマングリーンプラン）の支援：制度的には林野庁のヒューマングリーンプラン（森林空間総合利用事業）¹⁾適用の影響が大きい（図1）。道内では、赤井川（ヤマハ）の他、ニセコグリーンピア（東急）、津別（コクド）、狩勝高原（セゾン）、大滝高原（3セク予定）の5か所が実施段階にある。面積では全体的に100～800haのものが多く、赤井川は最大の2470haでありキロロ開発のスケールの大きさがわかる。

ヤマハのリゾート開発戦略：日本楽器製造として発足したヤマハは楽器、オートバイから総合レクリエーションへと幅広い事業展開していて、余暇・サービス付加価値産業へのインセンティブが強い。開発事業では、マリンリゾートとして沖縄久米島の「はいむるぶし」、三重県の「ねむの里」、総合レクリエーションランドとして静岡県掛川の「つま恋」などを手掛け、マリンスポーツが主流であった。しかしヤマハは、スキー場などウィンタースポーツへの事業展開には遅れをとったことから、北海道道南地区への進出が悲願だったといえる。

事業展開の特質：赤井川村の場合、大面積を占める国有林の活用が検討され、この林野庁の制度適用により、開発が具体化した²⁾。事業主体は、赤井川村も参加した第3セクター・キロロリゾート

開発公社（当初は赤井川森林レクリエーション開発公社、資本金80億円）とヤマハ北海道リゾート（資本金21億3300万円）で、ヤマハグループが主導権を握っている。前者にはパートナー企業35社が参加しており、道内外の銀行・不動産・旅行・百貨店・鉄道・スポーツ等の会社が名を連ねている。この2社は提携関係にあり、前者が現地開発にあたっての許認可やスキー場、マウンテンホテルなどパブリック部門を担当し、後者が今後建設されるホテル、タウンエリアやゴルフ場などメンバーシップ部門と役割分担している。社員数は双方で270名で、札幌に50名、現地に220名の陣容である。

「キロロ」は、他の道内リゾート地（トマム・サホロ等）と同様、カタカナ3文字のイメージにするため、地名ではなく「心」を表わすアイヌ語が採用され、広告宣伝に活用された。

またヤマハは、リゾート事業者としてのノウハウを持っていたこともあり、地元対策は他の事業者よりも綿密に行なわれた形跡がある。まず地元でとれる農・水産物を積極的に活用しようとする姿勢が挙げられる。ミニトマト・ハーブなどは地元農協が試験栽培を行なっている。ただホテルの食材は農産物としては特殊なもので、地元農産物との間に価格・数量面で隔たりがあることも否定できない。また事業者側が意図する地元とは、後志管内一円で赤井川村を指すわけではない。

環境アセスメントでは、かなり広範な検討が行なわれ、汚水処理などでも真剣に取り組まれている。しかし事業者側にとって最も幸運だったのは、開発地域に自然公園法の規制地域がなく、自然保護団体からの反対が顕在化しなかったことにある。

リゾート施設計画と開業初年の動向：ホテルの

*北海道大学地球環境科学研究科(院)

| 営林(支)局 | No. | 名称 | 実質事業主体 | 種別 | |
|-----------------|----------|--------|--------|----|---|
| 北見 帯広 札幌 | 17● | 津別 | クドン | ス | |
| | (22)● | 狩勝 | 西武 | ス | |
| | 8● | 赤井 | ヤマ | ス | |
| | (23)● | 大滝 | 東3 | ス | |
| | 函館 青森 | 11 | ニセコ | ク | ス |
| | | 6* | 西岩木 | ク | ス |
| | | 12 | 岩手高原 | ク | ス |
| | | 19 | 夏油高原 | ク | ス |
| | 秋田 前橋 | 3 | 南蔵 | ク | ス |
| | | (24)* | 黒伏 | ク | ス |
| 1* | | 草津 | ク | ス | |
| 2* | | 玉原 | ク | ス | |
| 4* | | 嬌恋 | ク | ス | |
| 7* | | 鶏項 | ク | ス | |
| 10* | | 草白 | ク | ス | |
| 18* | | 裏磐梯 | ク | ス | |
| 20* | | 飯土 | ク | ス | |
| 21* | | 塩原 | ク | ス | |
| 長野 名古屋 大阪 | (25) | 赤仁 | ク | ス | |
| | (26)* | 三国 | ク | ス | |
| | 5 | 富士見 | ク | ス | |
| | (27) | 木曾 | ク | ス | |
| | (28) | 粘 | ク | ス | |
| | (29) | 山中山 | ク | ス | |
| | 13 | 今 | ク | ス | |
| | 14* | 藤ヶ | ク | ス | |
| | 16* | 三ツ石 | ク | ス | |
| | (30) | 三木 | ク | ス | |
| 熊本 | (31)* | 中央森林公園 | ク | ス | |
| | 9 | 五ヶ | ク | ス | |
| | 15* | 一ツ葉 | ク | ス | |

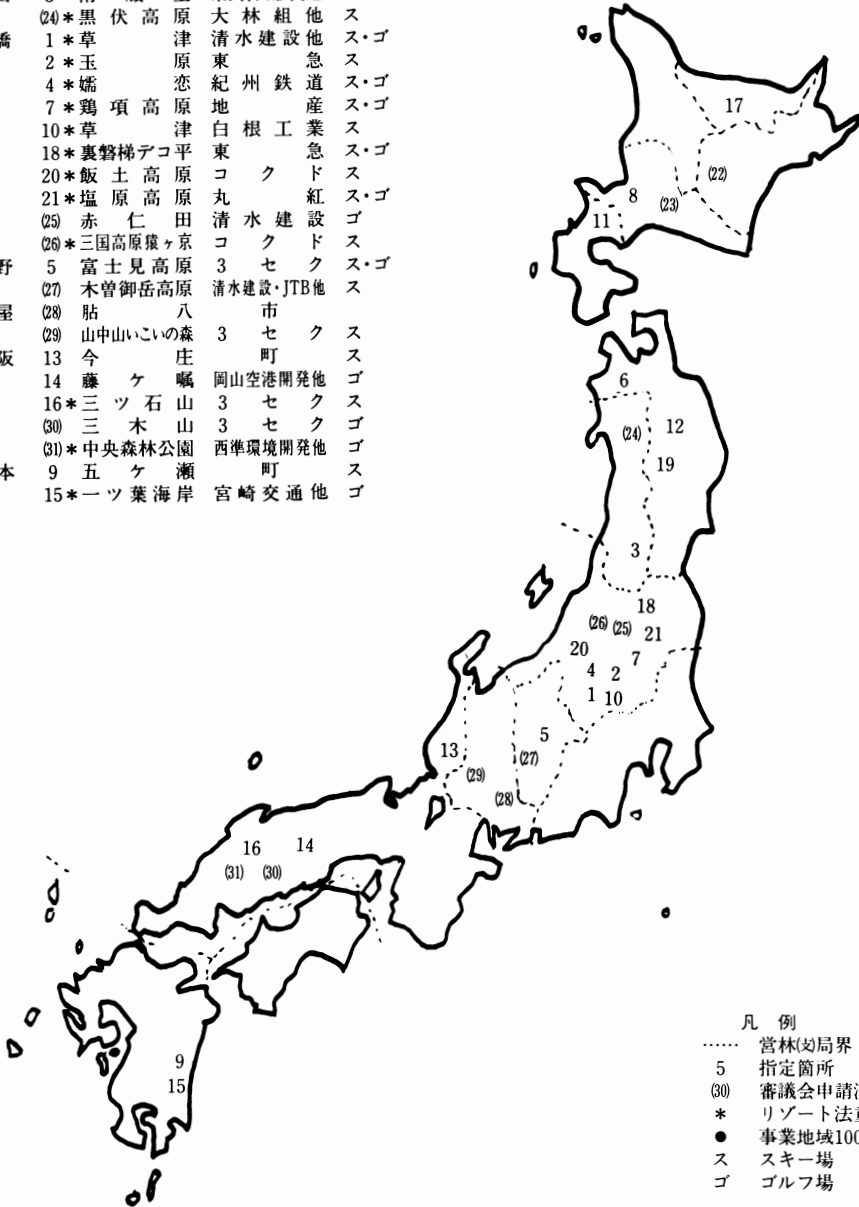


図1 ヒューマングリーンプランの進捗状況(1991年12月現在)
林野庁資料より作成

宿泊料金は、ツインが2人で2万円余りで、今のところ連泊割引はなく、長期滞在がしづらい。このため、パックツアーや社員旅行（道内）などが主流となっている。長期滞在者への配慮は、食事のメニューなどに限られている。現在はマウンテンホテル（142室）のみだが、1993年末にはタウンエリア（ショッピング街）とホテルピアノ（282室）が完成予定である。コンドミニウムについてはバブル崩壊で、若干計画の見直しも検討されている。

スキー場（スノーワールド）³⁾は、高速クワッド4本とその他4本でスタートし、翌1993年のシーズンに朝里ゴンドラが加わった。スキー場の他には、スノーモービルワールドや1993年開業予定のゴルフ場（村の中心地区）、オートキャンプ場、アーチェリー場、冒険の森、わさび園等の計画もある。

初年度の入り込みは全体で33万人で、札幌・小樽方面からのスキー日帰り客が多い。そのうち1割がホテル宿泊者で、8割が本州方面からの入り込みであり、「札幌ステイ」のスキーツアー客も少なくない。現在入り込みがスキーシーズン（11～4月）に偏っており、グリーンシーズン（5月～10月）の利用増進が課題である。夏のレクリエーションワールド（ゴルフ、テニス、アーチェリー

等）では、軽スポーツを通じた通年型リゾートを目指している。スキーアカデミー（スキースクール）やスポーツメイト（インストラクター）は、技術より楽しみ方に重点を置いていて、ソフト面から支えるべく「パーティゲーム」を提唱している。

3. 地元地域の現状

赤井川村の置かれた立場：赤井川村は、小樽市南方の余市岳の懐のカルデラ盆地に位置する有数の豪雪地帯である（図2）。急激な過疎化により、1991年には人口が道内最少（1300人余り）を記録した。キロロリゾートがオープン（1991年12月12日）で、その後は後志管内で唯一人口増加に転じたことから、リゾート開発が過疎化に歯止めをかけたといえる。

当初は「陸の孤島」と呼ばれ、一時は人口流失で道内自治体最少を記録したこと、面積の大部分が森林でその多くが国有林であること、わずかな耕地も高冷地のため農業の適していないこと、こうした赤井川村の状況は、今日リゾート開発が先行した占冠村との共通点が指摘される（武田、1993）。言い換えれば、赤井川村は占冠村の歩んだ道を追っているとも言えよう。

〔村内土地利用状況〕



図2 赤井川村内土地利用状況

開発後の村と周辺集落の変貌：リゾートオープン後1年と間もないため即断はできないが、村の変貌に触れておこう。まずキロロの村として全国的に有名になり、村民の自覚が芽ばえた。また、初年度に村に納入された固定資産税額は2億円余りで、村の人口も1299人から1430人に増加した。社員寮は120室がすぐ満室となり、500室を新たに建設中で、村の中心部にも社宅(36世帯)がある。スキーシーズンには地元から冬の農閑期を利用して60人ほどが非常勤として働いている。地元へのUターンは現在のところ数名にとどまっている。これは、リゾート事業者が必要とする人材が過疎化に高齢化が進んだ地元地域には乏しいことの影響がある。一応村全体として地域振興に好影響を及ぼしていると理解される。

国道339号毛無峠は、リゾートオープンの年に通年通行可能になった。しかし急曲線が連続する区間(事業名・望洋道路)の道路改修は終了したとされ、冬期を中心に交通事故の多発が懸念される。路線バス(JR北海道、北海道中央バス)や会員制スキーツアーバスは、札幌・小樽・余市の他千歳空港から運行されている。しかし入り込み客の多くは、札幌・小樽方面に直行するため、地元赤井川村に直接的に金が落ちることは少なく、「小樽の奥座敷」の感がする。

キロロと隣接する常盤地区では、商店の改築や民宿の開業、別荘地の分譲など景観の変化が見られる他、土地売却など土地所有の移動も囁かれている。しかし地元集落では、リゾート開発とは関係なく従来通りの生活を営んでいる世帯の方がはるかに多いと言える。

4. 今後の開発の方向性

キロロリゾートは一応順調なスタートを切ったが、バブル崩壊など今後は新たな経済状況も想定され、今後の成り行きが注目される。とりわけトマムと同様に地元とは隔絶した租借型リゾートとなるのか、地元の意向はどれぐらい受け入れられるのか、さらには庶民の余暇感覚とフィットするのかなど課題は多いといえる。

謝 辞

巡検・資料収集にあたっては、北海道地理学会

の山下教授・進藤教授・大内助教授・岩崎助教授・小松原教諭をはじめとする先生方にお世話になった。また現地調査に当たっては、キロロ開発公社の原岡副支配人には貴重な情報の提供を受けた。また森林総研北海道の土屋室長には、筆者のリゾート研究の方向性を導いて頂いた。改めて感謝いたします。

注

- 1) 1991年12月現在の資料では、全国でこのプランに指定が21か所、審議会答申で10か所あり、全国的には東京圏外縁部の前橋営林局管内が10か所と半数を占めている。またこのプランは、リゾート法(総合保養地域整備法)と同様、民間活力導入に特色がある。リゾート法と重複した指定地域も13か所と半数にのぼっており、施設計画でもスキー場、ゴルフ場、ホテルが多い。
- 2) トマムでは、開発計画の決定までには紆余曲折があり、当初案が三度改定され、ようやく東北資本の関兵製麦参入で、開発が始動している。
- 3) スキー場のレイアウトでは、朝里上部のエキスパートコース以外で緩斜面が多く、下部ではストックで漕ぐ必要がある、道内スキーヤーの評判が良くない反面、内地からのスキーツアー客は、粉雪に満足するなど評価基準が異なっている。

参考文献

- 武田泉(1991)：富良野大雪地域におけるリゾート開発の動向と地域的対応。札幌大学教養部紀要39所収,68-89。
武田泉(1992)：キロロリゾートオープン。地理37-5,102。
武田泉(1993)：リゾート開発の展開と地域の対応。林業経済532,21-26。